International Exchange Center, Nara Women's University
奈良女子大学

国際交流センター NEWSLETTER

Mar. 2018 Vol. 50

卒業留学生の言葉

奈良女子大学の魅力

趙 佳鋆　大学院人間文化研究科博士前期課程
生活文化学専攻　2回生

奈良女子大学との初対面は、2015年の春でした。あの頃は見学しに来てました。水色の記念館は100年間の歴史を析出し、自分の物語を語っているようです。先生と面談する前に、キャンパスを一周回って歩きました。たまに虫の鳴き声、女の子の笑い声が耳に入ってきました。このような静寂なキャンパスに癒され、心まで穏やかになったので、あとから担任教授の松岡先生と面談するときの緊張感すら薄れていました。

2016年の4月に、無事に大学院に合格できて、奈良女子大学の本当の一員になりました。その時の感動と誇りは今まだ感じています。いままでどんな苦難でもその時のためなら、耐えられると思いました。

この短い2年半に、2年半以上の面白さや多彩なことを体験しました。授業や研究が忙しくても、奈良女子大学の剣道部に入ることにしました。日本の文化をもっと身近に味わえたし、みんなと一緒に合宿すると一緒に寝て、同じものを食べて、短い1週間でもすごく仲良い仲間になりました。また、恥ずかしいですが、恋都際のミスコンにも参加したことがあります。

入学式にて(左：趙さん)

これは奈良女子大生しか実感できないことだと改めて思いました。新しい友達ができ、新しい考え方に触れた自分が、奈良女子大学に入れたことに本当に感謝しています。

恋都祭

学生生活の節目を向かえ、社会人生活を新たに始めます。不安はありますが、いつまでも奈良女子大生としての誇りを持って柔軟な視点で社会に貢献できたらいいと思います。みんな一緒に頑張りましょうね！

Inside This Issue

卒業留学生の言葉
大学院生の国際学会での発表
センター及び国際課の活動
&センター来訪者

センター及び国際課の活動

1/11	留学生伊賀見学旅行
1/19	グローバル女性人材養成プログラム(NZ)第7回説明会
1/26	グローバル女性人材養成プログラム(NZ)第8回説明会
2/13	グローバル女性人材養成プログラム(NZ)最終説明会、TOEFL ITPテスト実施
2/15	グローバル女性人材養成プログラム(NZ)出発
3/14	グローバル女性人材養成プログラム(NZ)帰国
3/19	留学生川上村見学旅行、TOEFL ITPテスト実施

センター来訪者

●2018/2/15　デ・ラサール・リパ大学（フィリピン）

Alicia B. Botardo, PhD 氏
Vice Chancellor for Academics and Research

Jose C. Macatangay, PhD 氏
Dean, College of Education Arts and Sciences

他2名

大学院生の国際学会での発表

国際交流センターは、奈良女子大学大学院で学ぶ正規学生が、海外で開催される国際学会で発表する場合、航空運賃を支援する事業を行っています！

World Haptics 2017

柴原　舞
大学院人間文化研究科博士後期課程
生活工学共同専攻　1回生

2017年6月6日から9日の4日間、ドイツのFürstenfeldbruckでIEEE World Haptics 2017が開催された。触覚（haptics）分野の学会は欧米・ヨーロッパ・アジアと3か所でそれぞれ開催されており、本会議はそれらのジョイントセッションとして隔年開催されており、世界各国の触覚研究者が集う場となる。

触覚がテーマの学会であるため、発表形式はOral、Posterに加え、実際に開発装置や研究内容を参加者に触って体験してもらうDemonstration形式の発表形式がある。私は、現在進行中の研究内容をポスター形式で発表するWork-in-Progressという発表とDemonstration発表を「Temperature threshold to produce wetness illusion by changing contact area between dry cloth and skin」という題目で行った。私はWetnessの感覚の知覚メカニズムとその感覚の提示手法について研究しており、2016年度もEurohapticsにて発表を行った。そのため、今回の学会では私の研究をすでに知っている参加者にも再会でき、より深い議論を交わすことができた。また、個人的成果としては、この学会を契機に研究留学を果たすことができた。当初から留学の意志があったため、この学会中にオランダの研究者とミーティングを行い、研究を実際に説明したうえで、留学の承諾をもらった。

この学会は修道院の敷地内にある会場で行われ、趣ある建物や緑に囲まれ、和やかな学会となった。隣接する教会は荘厳な雰囲気で、パイプオルガンの演奏を聴くことができた。発表時間もアルコールやプレッツェルがふるまわれ、3日目のBanquetはAugustinerのビアガーデンで行われた。参加者の多くが集い、アルコールを片手に積極的な交流・意見交換を図った。研究に関して多方面からフィードバックを得ることができたこと、こういった国際学会ならではの楽しさを味わえたこと、非常に有意義な学会参加であった。

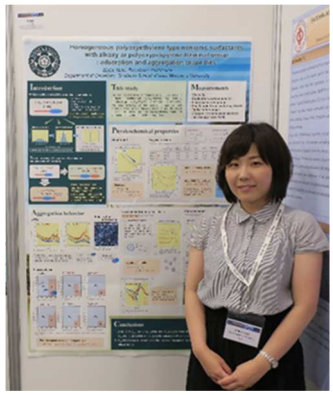
発表の様子

7th International Colloids Conference

矢田 詩歩
大学院人間文化研究科博士後期課程
共生自然科学専攻　２回生

2017年6月18日から21日までの４日間、国際交流センターの助成を頂き、スペインのシッチェスにて開催された "7th International Colloids Conference"に参加しました。シッチェスはバルセロナから電車で３０分ほどのところにあり、地中海に面した小さな街です。本会議は、世界最大規模の出版社ELSEVIERが主催する国際会議であり、約５０ヶ国から３３０名以上が参加する大規模な国際会議でした。今回の国際学会では、"Homogeneous polyoxyethylene type nonionic surfactants with alkoxy or polyoxypropylene terminal group: adsorption and aggregation properties"という題目でポスター発表を行いました。洗浄や化粧品などの幅広い分野で用いられているポリオキシエチレン（EO）系非イオン界面活性剤に対して、さらなる性能の向上や機能性の発現を目指して、EO系界面活性剤のEO鎖の末端を修飾した種々の構造の非イオン界面活性剤を新規に合成し、これらの界面活性剤が水溶液中で形成する分子集合体の構造を検討した結果について発表しました。

↓シッチェスの街並み



↑ポスター発表前

本会議で発表を行うことで、コロイド・界面化学分野の世界トップレベルの研究者に自分の最新の研究を"自分の言葉で"伝えることができ、大変貴重な経験を積むことができました。また、世界トップレベルの研究者の最先端の研究について聞くことができ、最新の情報を得ることができました。本会議をきっかけにして、今後の研究の方針も明確になり、これからも研究を続けていく上でたいへん貴重な経験となりました。

23rd Congress of World Association for Sexual Health

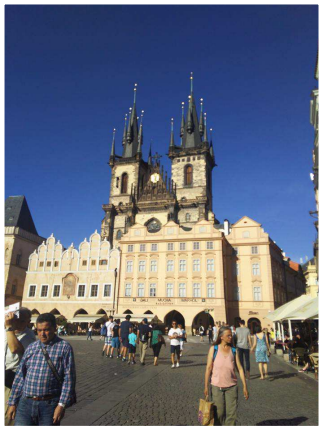
岩垣 千早

大学院人間文化研究科博士後期課程
共生自然科学専攻　2回生

2017年5月28日から31日までの4日間、チェコのプラハにて開催された23rd Congress of World Association for Sexual Healthに参加してきました。本学会は、2年に1度開催される、性の健康と権利に関する学問である性科学分野では世界最大規模の国際学会に数えられています。
その中で、私は「Japanese sexual minority's help-seeking behavior after recognition of mental distress」と「The influence of internalized stigma on sexual minority people's help-seeking」という題目で2つのポスター発表を行いました。本研究は、同性愛者を始めとするセクシュアル・マイノリティが、メンタルヘルス上の問題を自覚した後に、どのような意思決定プロセスを経て援助要請行動を求めるかを、当事者へのインタビュー調査から明らかにすることを目的としていました。結果、当事者は、援助者からの差別的態度を向けられることへの不安や、自身のセクシュアリティを開示することへの抵抗感など、様々な心理的葛藤を経て援助を求めていることが考えられました。また、当事者自身が、社会から向けられる差別的態度を取り込んだ結果、自身のセクシュアリティに対して否定的な思いを抱いていることも大きくその人の意思決定に影響を及ぼしていることが考えられました。

ポスター発表では様々な方から意見を頂くことができました。研究領域や経験の異なる方には、まず研究の基礎となる専門用語や研究方法について、英語で説明を行わなくてはならず、語学にはそれなりに自信があったのですが、会話のスピードがかなり速く、また矢継ぎ早にされる質問についていけず、周りの方に助けられながらなんとかこなした状態で、今後の課題だと感じました。他方、同じ研究領域の方とは、落ち着いて意見を交換することができました。国際学会ということもあり、各々の国におけるセクシュアル・マイノリティ関連の取り組みや、研究の状況を知ることができました。そして、背景とする文化や宗教観が、セクシュアリティを考えていく上で非常に大きな意味を持っていることを再認識し、この視点を次の研究に是非盛り込みたいと思いました。学会全体を通して、この分野を牽引する方たちと交流をもてたことは、次の研究を行うモチベーションとなりました。また、本研究領域の最新の動向を知れたことも、今後研究を行っていく上で非常に大きな収穫であったと思います。

学会資料


街の様子

Lux Europe 2017

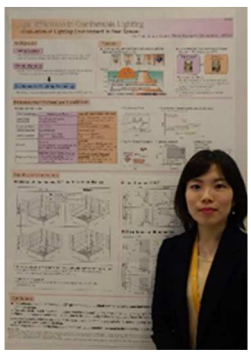
大江　由起

大学院人間文化研究科博士後期課程
社会生活環境学専攻 1回生

2017年9月18日から20日にかけて、スロベニア（リュブリャナ市）で開催されたLux Europe 2017に参加しました。本学会は4年に1度、ヨーロッパ圏を中心に照明に関する研究者が集う学会です。今回は13回目の開催で、参加国は約20ヶ国でした。今回のテーマは「Lighting for modern society」であり、オーラル・ポスターなど合計約130件の発表が行われました。そのなかで私は、「Age Difference in Comfortable Lighting -Evaluation of Lighting Environment in Real Space-」という題目でショートプレゼンテーションとポスター発表を行いました。本研究の目的は、幅広い年齢層に対して快適な照明環境を提案することです。本学会では、実験室で得た知見を生活空間へ適応できるのかを検討した結果について報告しました。

ポスターの前でディスカッションしているなかで、研究の意義や立ち位置を改めて確認し、今後自身の研究をさらに発展させていくためには何が必要なのかを考える良い機会となりました。また、学会の公用語が英語であったため、英語を使ったプレゼンテーションの表現手法を学ぶこともでき、研究成果を国際的に発信していくうえで有意義な経験となりました。さらに、学会の一部となっている食事時間やブレイクタイムなどの場でも、他国の教員や学生の方々と意見交換をすることで、照明に関する様々なトピックの見識を深められました。学会参加者のうち、アジア人はかなり少なかったため、研究内容だけでなく、日本（漫画やお弁当の習慣、海外で活躍する日本人スポーツ選手など）について話す機会もありました。

日本人がほとんど行かない国とされているスロベニアという国で、異文化に触れながら大変貴重なひとときを過ごすことができました。今回の経験を糧として、今後の研究活動に活かしていきたいと思います。


ポスター発表前

2017 Workshop on Innovative Nanoscale Devices and Systems（WINDS17）

金井 友希美
大学院人間文化研究科博士後期課程
複合現象科学専攻　2回生

私は2017年11月26日から12月1日の間、アメリカのハワイで開催された2017 Workshop on Innovative Nanoscale Devices and Systems（WINDS17）に参加しました。WINDS17は、目に見えないほど微小な系での物理である「メゾスコピック系の物理」が世界的に大きなテーマとなって爆発的に研究が始められた当初に企画された国際会議「New Phenomena in Mesoscopic Structures (NPMS)」の流れをくむ著名な国際会議の一つで、主としてヨーロッパ、アメリカ、日本から多くの著名な研究者が参加しています。今年は二次元物質、トポロジカル物質、量子ドット、量子コンピュータなどをトピックとしたセッションを中心にナノスケールのデバイスや物質に関して、理論物理学といった基礎科学から電子デバイス応用などの応用科学に至るまで幅広い議論が行われました。

私は最終日に口頭発表を行いました。量子コンピュータの原理としても注目されている「量子もつれ」と呼ばれる量子力学特有の非局所相関を含む電流や電流ゆらぎ相関を理論的に議論しました。英語で発表をする上での話し方や見せ方に反省点はありますが、量子もつれを観測するようなナノデバイスに関する実験について新しい提案をする内容であり、多くの研究者に関心を寄せてもらえました。

発表の様子

国際会議は幅広い分野の研究者が参加しており、現在世界的に注目されている分野における最先端の研究について聞くことができ、いい刺激を受けることができました。自分の研究の立ち位置なども改めて確認でき、これからの研究の方針を考える上でもとても価値のある経験でした。

セッション外では初日からアメリカの研究者と英語で研究内容について話す機会がありました。英語での議論は研究者としては必須ではあるもののあまり経験したことがなく、国際会議に参加したことで貴重な機会を得ることができました。ポスターセッションでも自分の専門でない分野も含む様々な研究について活発な議論をすることができ、視野を広げることができました。

Chinese Women in World History

辜　知愚
大学院人間文化研究科博士後期課程
比較文化学専攻　2回生

2017年7月11日から14日にかけて、台北で中央研究院近代史研究所が主催する国際シンポジウム「世界史中的中華婦女」（Chinese Women in World History）」に参加しました。このシンポジウムは4日間にわたって開催され、およそ90名の発表者からなる大規模なものでした。台湾や中国、日本、韓国、アメリカなどの中国女性史研究者が一堂に集まった大会であり、中国女性史を研究する人間として大変貴重な機会でした。

11日、指導教員である野村鮎子先生、立命館大学の杉本史子先生、秋田大学の羽田朝子先生、日本大学の周一川先生と「日本帝国主義の下の越境する中国人女子留学生」というテーマでパネル発表をしました。

学会の様子

私の発表テーマは「1910年代国民国家の衝突の下の女子留学生の越境体験：楊歩偉自伝における留学体験」でした。楊歩偉（1889～1981）は1913年から1919年にかけて日本に留学し、東京女子医学専門学校で医学を学んでいた女性です。私の発表は楊歩偉の自伝における留学体験の語りを通じて、1910年代という複雑な国際情勢の下での、彼女のアイデンティティなどを考察したものでした。

今回のシンポジウムでは、口頭発表のほか、いくつかのパネルに聴衆として参加し、自分の研究領域（近代中国）に関するものはもちろん、中国古代～近世の女性史に関する発表からも刺激を受けました。また、休憩時間や懇親会で、先生方や同世代の大学院生と交流をもつことができました。同じ領域でもそれぞれの国では研究の視点が異なるので、こうした機会で視野を広げることは大事だと思いました。

奈良女子大学　国際交流センター
NEWSLETTER Vol. 50　2018年3発行
〒630-8506 奈良市北魚屋東町
TEL: 0742-20-3736
Email: iec@cc.nara-wu. ac. jp